

研究室の窓から



癒しの教育

まどかアツセマ庸代

● 癒されゆるされ癒える変容

いやしという言葉に最初に出会ったのは、カトリックミッションスクール中学校の「宗教・倫理」の時間で、『新約聖書』（ドンボスコ社）の癒し手としてのイエスキリストに「癒された」人々という

神・人間関係の構図で使われる言葉であった。人間としての存在が「癒され許される」所与の「いのち」は、その時代の人間能力を超えた根源的テーマであり、教育や教育制度の管轄だけでは網羅できない宇宙観や人類の歴史の認識法の問い直しまで迫られてしまっほど壮大な言葉である。

「癒しの教育」は果たして現代の大学と教育の枠組みにいる自分に許されたテーマであろうか。大学教育を卒業してできる訳でもない。自身のいのちを問われる研究室の窓辺にて、広い空の色に染み入る夕陽の橙に日々を癒されている。「またあしたあ」と自ずと来ては往く循環型・円還まどか型死生観を見ている。ガイア仮説（環境風土）場の論理・相補的関係的存在論を、生命科学論と繋げて見ている。トランスフォーメーション（変容）は人間生命意識の臨界での可能性であり、集中力の結果である。癒しは人間の見える身体性を超え、物・者・霊（もの）

という見えない生命意識無意識までも気づかされる。知と信の協働場としての「大」学である。西欧東洋和風の学園体系や教育システムと個人の意識認識の両方でも工夫できる。近代型学科大学をモデルとした若き議会制民主主義の会議法や科学的思考法等、マナー高等教育の場だけでは人間経済中心で心もとない。

● 科目・宗教スコラを超えて、 科学文明と宗教文化の対話

「夕暮れになり日が沈むと」、「一人一人に手を置いて、民の中のあらゆる病氣、あらゆるわずらいを、おいやしになった」（マルコ福音書 16:7）、「起きてあなたの床を取り上げ、そして歩きなさい」とこの人はすぐにいやされ、後に自分を癒したのはイエスであったとユダヤ人に告げた。このことから、イエスは安息日に祈りの床をあげさせ、神を父と呼んで神と等しいものとされたので、当時の国家正当派は十字架

につけようと計り始めた。

癒しは身体を通した霊的癒し(心治療)の場面で登場しており、その時代の医療の限界点といのち(人の生と死と再生)の死生論を説く手立である。癒しとその後

の医学は神の業として専門化・聖職化されてきた。身体的説明だけでなく人生を説いていく医療であった。近代産業化・市民化西欧在俗化の西暦二千年を経て、日本人の芯からの癒されは、果たしてどのようなものであろうか。

● 和学事始ジャポノロジー 医療自文化のフレイミング

二十一世紀初万博、愛・地球博の市民発信パビリオンにて、筆者は「Japologie ジャポノロジー Narrative based Medicine」を発信した。(まどか二〇〇五・五 CNN ニュースの如く、二分間に自分の一生を動画高速編集し、上映した。プロジェクト名 WWP(World Wellness Project 堀田田浩医師)。櫻の着物と茶姿とゆかた

の男女ゼミ生で会場を和した。

筆者は、生命科学論と死生論研究者として、また、NPO型市民型(玄人素人同意識格)医の学会を目指した過程で、和学研究会・日本ホリスティック医学協会役員及び日本WHO協会幹事として参画した。自然の叡智市民化万博議論はここでは兎も角として、二十世紀から二十

一世紀ポストモダンの生命科学と人間の価値体系模索研究生活の途で、一つの死生論描法(生命科学の方法見直し)を呈示した。

映像ストーリーは『田喰ENKU』と題した。二十世紀レクイエムであり、「喰らう」、食すということは、「自然の生命のちを頂く」即ち「全て分かる」ということ。あり得ないが、「まどかを知る」「自己の生命・親子を通した命を知った」という意である。制作は、プロフェッショナルな仕上げを旨とし、大学機関での学会発表許容度の画質では不明瞭なので、まず、龍村仁監督(「地球ガ

イアシンフォニー」)に依頼をした。研究構想のフリートリーキング相談から始めたかったが、プロデューサーの電話応対はまず「制作費」という関門。膨大で、私の研究費には見合わない。まず発想の自由な語り場・空間時間人間を私は必要としていた。継続的研究プロジェクトとして構想している。

大学や研究所機関だけでないネットワークと東西統合と自文化融合により、監督の直観や発想や技術を共同研究者と位置づけ、篤と話をしたい。ヒントを頂き写真構成とし、原案作り。ゼミ生で、私の「ホリスティック死生論」受講生で良き理解表明者であった服部愛子さんに構想を話し、春休みまでに収集したDNA分子生物学研究時代から科学哲学・関係論とセルフクエスチョンワーク・ヒーリング西欧医学化学療法(東洋的医療(植物生薬)統合・神事人事の祭事・親子のライフストーリー等半世紀分の資料写真と物語をしつつ、私の研究史)プロセ

スを説明した。

● いのちに聴く、学術形成を

『和学は 日本人の身に似合った医科学とライフサイエンス探究の途からの学問事始です。

和語「い・の・ち」:inochiは 日本風土の自然が運んだ、昔からの響きを持つ「平仮名ことば」訓読みことば)で、倭ことばでもあります。日本人代々の身に染みることばのいのちのちspiritが、そこにあります。安らぐことば遣いは人のこころのみならず、からだとたましいの健やかさをもたらします。

ことば遣い(生命意識の認識法)に気をつけることで、その人の生と死と誕生の「物語」が健やか康らかに、語り継がれ、日本人のライフスタイルとして風土文化となっていくますし、今も成っています。いのちはDNA言語だけでなく、親子の人生の味わい方を求めます」

とパピリオン大映像『和学』『円喰』に

語りを載せた。ファンタジーなヒーリング音楽と五感六感七観映像とした。その場が安らぐ空間アートをめざした。

いのちのことはいのち自身が智って居る。自然の叡智 自らのバランス力を用いる。自然の和するいき遣いに聴く。医科学の西洋知識体系や生活秩序のパラダイム枠に留まらず、いのちのことは、自らのいのちに聴く。その術を各人生習慣・自文化のライフスタイル(生死の秩序)にし得る。

● 「わが家」「故里」の受容の瞬間が癒えの時back home

三十代より「まどか」と名乗り、研究教育文化の業に居る。自己(のルーツ)を知ることも癒しである。

まどかソサエティは、大正ロマン派の父母文化が結婚後実った我が家のスペース空間に命名した雅名で、「まどやかに人が集おうとする その思いで人は育つ」という家庭家族のフィロソフィーと

もいえる。家庭哲学は、私的にも公的にも意味深く、死生論でもある。親の死は師である。

円茶会「茶の癒」でまどやかに「Tea ceremony as Tea therapy」を成す父母子の一生の自己否定・自己受容は日常というケと非日常催事のハレをもって心の奥深く安らぐ。

和学 Le Japonologie は、私たち日本の自然や生活風土を自己化・社会化して、自身のことば遣いや心遣いでものがたり、そのものに答えが潜み、自身のライフスタイルの中に育まれている。「いのちの生き方を言語化するという、自文化に根ざした日本流死生論であり、日本流円環型ライフサイエンスとして、ここに和学を提唱します」とたったひとりの日本の女の子の出合った宇宙のミクロマクロのうつしみを現代の万国に遺した。科学者技術者学者も集い市民パピリオン学会と生る。

● Self Narrative Based Medicine

《映像『日喰』考察》

生命科学の風土化は、自己の生死・家族親子の生命観など、身体的生命観に留めず、精神風土とつながった生命認識法による医科学教育・理科教育が必要である。和学は、ポストモダンライフサイエンスを構想し実践する。その描法は、必ずしも物理化学的書式法による生命科学だけを範疇としない。身心とも、語り部・神話的・物語的・ナラティブアプローチによる相対的關係の自伝的内在空虚の宇宙探求の医といやしの試論と生る。

まどかアッセマみちよ

南山大学心理人間学科・人間関係研究センター

